

# 「能における狂ひの美学」—実演とワークショップを通じた体感—

## 能に想う

中島 貴子

数年前に秋田巖教授が能に関する講座を主催され、聴講した私は初対面でありながらいきなり研究室におしかけ「素晴らしい能楽師を知っています・・・」とお伝えした。あの日から時を経て、今回『能における狂ひの美学』という講座が催されることになった。能は理論や概念から入ると難解であり敬遠されがちであるが、本物に直に触れることで全く違う感性が刺激されるとの確信だけはあり、またそういった機会を提供してくれるのが大学ではないかという想いがあったのである。

辰巳満次郎先生は、私の師匠でもあり20年以上前から時折舞台も拝見してきた。心理学者の中には世阿弥の能楽論の中に深層心理学との共通性を見出し語られる方も少なくない。また能のシテとワキの関係は、クライアントとセラピストの関係に酷似していると言われることも舞台をご覧になれば納得されるだろう。しかし一方で私は、師匠と弟子という関係もセラピストとクライアントの関係に共通するものがあると思うのである。弟子は決して師匠の知識や芸の享受だけを期待するのではなく、その人間性に惹かれ自己の成長の伴走者として弟子であり続けようとするのではないだろうか。また反対にセラピストもクライアントから教えられ成長させられるように、弟子によって師匠が刺激を受けて成長するという相互作用が働くとするれば、弟子も仕甲斐があるといえるだろう。そういった観点からいえば、心理臨床家も一生を通して、自らの人格を成長させ豊かにしていく使命があるように思われる。堅苦しく考えすぎると辛くなるが、楽しみながらも魂に栄養を与える何か

に出会いたいと思う。その為に芸能者が「初心忘るべからず」と、常に基礎にたちかえり徹底的に稽古するように、心理臨床家を志す者も、まずは拠り所となる理論や技法の基礎をしっかりと身につける努力を怠ってはいけないのだと教えられるのである。私は今までの人生の中でも辛かった時期に、能の稽古に通うことで確実に癒されていたように思う。能には何か不思議な力があるように思えてならないのである。

私は辰巳先生のような伝統芸能の世界に生きる方々の底力の源にある、先祖を敬う気持ちや代々受け継いだものを後世に伝えていく使命感、また人との繋がりを大切にする真摯な姿に、いつも胸打たれ自身を反省させられるのである。能楽師も代々なら、弟子も代々という人も少なくはない。永い師弟関係の中で、弟子の不幸や死にも接しておられるためか、また能の描く世界そのものが心の深い部分を扱った作品であるためか、時折先生の言葉や態度には心理臨床家のような一面を垣間見ることがある。そのたびに私は圧倒され自分の卑小さに萎縮してしまうのだが、いつかそうならず堂々と振舞えるようになりたいと思うのである。能楽が受け継がれてきた歴史的な時間や、実際に能が演じられる際のゆっくりとした時間の流れは、観るものにいろいろなことを想像させイメージを膨らませるにはもってこいの空間であると感じる。時折眠りの世界にも誘われるが、ある人に「だいたいようぶ無意識は聴いているから」と言われて、妙に納得するようになったのである。

しかし今回の「能における狂ひの美学」では、眠っている暇はあまりなかったのではないだろうか。ワークショップでの初心者にも分かり易

い言葉でユーモアを交えての解説は、会場から常に笑い声が聞こえていた。先生の魅力でもあるく観客に有無を言わずに能の世界に誘うリズムやテンポ、間の取り方には会場から熱気すら伝わってきた。途中から私は時間のことばかりが気になっていたが、終了後に多くの方から、「ワークショップがあつて良かった。実際に体験してから観たので『黒塚』の鬼の動きや気持ちが良く分かった」という内容の感想を頂き、改めて体験することの大切さを実感した。また丁寧な解説があつた為か、「鬼女が負柴を投げ捨てた瞬間、うるうるしてしまった」「胸が締め付けられた」などの感想も頂いた。「とにかく辰巳先生の声に魅了された」「素晴らしかった」「目が釘付けになった」等々、私はアンケート用紙を用意しなかったことが、今だにとっても悔やまれるのである。当日まで準備にバタバタしていたことや、人が集まらなかったらどうしようという心配のために消極的になりすぎていたように思う。アンケート用紙を用意し

ていたなら、多くの个性的なご意見を賜り、今後に活かすことが出来たはずである。

実際には500人近い方が学内学外から来場くださり、後ろの方にいた人は見えていたのか心配だった。宣伝をすれば、人は来てくださるということも確信できた出来事だった。

また今回の講座の中で、語られ実演された物語のどれもが昔の話でありながら、その普遍的なところのあり様において、現代に生きる私達と深いところで繋がっていると実感した気がする。

能の中に描かれる人物の心理は、とても複雑であり繊細でありどのようにでも想像を膨らませることが可能であることから、たとえ同じ作品であっても観るたびごとに全く違う発見があり、演者の違いや観客自身の心境や体調にも影響され、歳を重ねるごとに豊かになっていくのではないだろうかと思われる。これからも能の持つ不思議な力に魅了され続けたいと願っている。

